慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リチャード・ライトとアフリカ : 故郷喪失者の遡航
Sub Title	
Author	竹内, 美佳子(Takeuchi, Mikako)
Publisher	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集編集委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集 (2007.) ,p.229- 239
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40001001-00000001-0229

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リチャード・ライトとアフリカ

故郷喪失者の遡航

竹　内　美佳子

「私はアフリカを見なければならない。執筆中の作品を冬に書き上げたらその地へ赴き、当世に類のないアフリカについての本をものするのだ。」Richard Wright（1908-60）が、渡仏後間もない1947年の日記に綴る祖先の地への思いは、長編小説 *The Outsider*（1953）上梓の2か月半後に実現をみた。ライトのアフリカとの主たるかかわりは、1947年に Jean-Paul Sartre を通じて *Présence Africaine* 誌の中核に加わることに始まるが、とりわけ、Gold Coast の首相 Nkrumah のブレーンでもある George Padmore との交友は、脱植民地化闘争の現場にライトを誘うものとなった。後にガーナとなるこの国の民主化闘争に立ち会う旅の記録としてライトが世に問うたのが、*Black Power*（1954）である。1960年代のブラックパワー・ムーヴメントを予言するかのようなタイトルを掲げるこの書は、汎アフリカ主義や実存主義とのかかわりに醸成された視野に立ち、アメリカ黒人解放をも、グローバルな脱植民地主義の射程に捉えるものである。

ライトの著作の中でも、この作品は特に評価が分極化したと言える。出版直後にアメリカの主力メディアが示した敵意と、イギリスの Angus and Robertson 社による出版拒否は、ライトを落胆させるに十分だった。*Time* と *Newsweek* はこの作品を無視し、出版4日後に掲載された *The New York Times Book Review*（1954年9月26日付）の書評は、ライトの植民地主義批判を、白人の善意を一切認めようとしない人種的復讐心の所産と酷評した。*Saturday Review of Literature* や *The New Yorker* を含む各誌の反応は、反植民地主義を打ち出した講演集 *White Man Listen!*（1957）についても同様であり、こうした50年代の体制的論調は、ライトの批判的言説が英米に与えた衝撃を窺わせるものである。

その一方で、『ブラック・パワー』の示すアフリカとの距離感覚に、コロニアル・ディスコースとの近似性を指摘する批評もみられる。Ngwarsungu Chiwengo はこの作品が、「主体」としてのアフリカ系アメリカ人と、「他者」としてのアフリカ人とのヒエラルキー関係を形成すると主張す

る。S. Shankar は、ライトが反権力主義的である反面において、西洋的合理性や近代性を特権化すると見做し、アフリカの解放をめざす反植民地主義と、アフリカを西洋という著者の「故郷」に同化吸収する植民地主義とが、テクストに混在するとみる。

このような作品解釈上の分極化は、ライト自身のアイデンティティの分節化を部分的に反映するものでもある。「黒い肌という共通性は、私のアフリカ理解の助けにならなかった」という言葉が示すとおり、ライトの前にアフリカは「絶対的他者性（the absolute otherness）」として立ち現れる（*BP* 44）。同時に、アフリカの大地の色と、強烈にインプロヴァイズするダンスは、故郷アメリカ深南部にいるかのような既視感をライトにもたらした。西洋性とアフリカ性との間を揺れ動く錯綜の中で、ライトのアフリカをめぐる言説はいかなる政治性を表明するであろうか。

1．大西洋の裂開

『ブラック・パワー』を書くことがライトにとり、脱植民地化闘争に立ち会う営みであると同時に、奴隷のパースペクティヴから近代性の前提を問う作業であることは、旅の起点が暗示する。ライトはまず、自らの出航するリヴァプールがかつてイギリス奴隷貿易の拠点であり、その港と都市がまさに奴隷の血肉を礎として成り立つ事実に、注意を喚起する。ライトの典拠文献の一つである Erick Williams の *Capitalism and Slavery*（1944）によれば、重商主義時代後期に海運力を膨張させるリヴァプールは、18世紀末には「旧世界最大の奴隷貿易港」の異名をとった（Williams 34）。1783年からの10年間だけでも、30万人余の奴隷をリヴァプール船籍の奴隷船が運んだ事実を、ライトは特記する。奴隷貿易廃止後、その都市経済は対米綿花貿易によって拡大し、1830年代には、アメリカ奴隷諸州からイギリスに輸入される綿花の実に9割強が、リヴァプール経由によるものだった（Williams 162; Buck 32）。

西洋列強が宗教的旗印のもとにアフリカで開始した収奪行為は、帝国主義という語では言い尽くせぬ純然たる戦争・犯罪行為である、とライトは定義づける。奴隷と金塊とを求めて夥しい奴隷船がアフリカへ向け出帆し、さらにはアメリカ黒人奴隷労働の収穫物が大流入したこの港から、ライトは自らの来歴を遡るのである。シエラレオネ沖で初めて目にする熱帯の日没を、彼は次のように書き記す。

> The dropping sun proclaimed itself in a majestic display of color that possessed an unearthly and imperious nobility, inducing the feeling that one had just finished hearing the dying, rolling peal of a mighty organ whose haunting chords still somehow lingered on in the form of those charged and spangled lances of somber fire. The ship sliced its way through a sea that was like still, thick oil, a sea that stretched limitless, smooth,

> and without a break toward a murky horizon. The ocean seemed to possess a quiet but persistent threat of terror lurking just beneath the surface, and I'd not have been surprised if a vast tidal wave had thrust the ship skyward in a sudden titanic upheaval of destruction. (*BP* 25)

この自然描写から浮かび上がるのは、帝国領土を引き繋ぐ大西洋の歴史的意味である。アフリカ民族離散体験の子孫であるライトは、「罪業の海（an ocean of guilt）」（*BP* 391）と、悲鳴を上げる身体としての海とをここに心象化し、そのカタストロフィックな裂け目に自己の深淵をみている。ここに黙示されるのは、船底に引き繋がれた換金動産としての身体、あるいは洋上に身を投じた無数の奴隷の身体である。奴隷の肉体が生む利潤を宗主国に還流させる三角貿易の「中間航路」という名の悪夢が、ライトの祖先を新世界へと強制移送した。西洋の貿易と宗教の包囲網に絡め取られた植民地世界の時間は、ヨーロッパ人の侵入によって分断され、その決定的な起点から流れ出すことを、ライトは講演集『白人よ聞け！』に論じる。『ブラック・パワー』の語りは、西洋の介入という「歴史的〈時間〉変位の裂け目（a gaping historic "time" displacement）」（*WML* 10）から発せられるものにほかならない。

アフリカに上陸するライトの想像力が、違和感と既視感との間を揺れ動く混乱の中でまず焦点を絞るのは、大西洋に接岸した奴隷船へと続く道を無数の人間が辿ったであろう、荒涼たる浜辺の原風景である。旅の終盤にかけて行われる、ギニア湾岸の要塞都市 Christianborg、Cape Coast、Elmina の歴訪に、ライトのアフリカ探訪の意味は収斂してゆく。ポルトガル、スウェーデン、デンマーク、オランダ、イギリスといった列強の手を16世紀以降渡り続けた城の歴史に、ライトは熾烈な帝国領土争奪戦の跡をみる。それはまさに新世界の植民地建設と軌を一にして、アメリカ奴隷制度の確立を促したものにほかならない。

この暗黒の歴史の中に、ライトが身体感覚として記憶に刻みつけるのは、城の奴隷牢に掛かる鉄錠の手触りである。記憶の廃墟と化した空間に人知れず意味を発現し続ける、この奴隷貿易の現場こそ、著者の辿り着く故郷であり流浪（エグザイル）の起点である。ゴールド・コースト最大の要塞であるエルミナ城で、奴隷競売室と監禁用石牢を訪れるライトは、子と引き裂かれ奴隷船への連行を待ったであろう女の姿をそこに幻視する。女奴隷の涙を、ゴールド・コーストに探し当てた「黄金に勝る光（a sheen that outshines gold）」（*BP* 384）と彼が捉えてみせたことは、強奪された無数の奴隷の身体を、歴史の地下牢から救出する営みと言える。航海途上のライトが落日の大西洋に見た存在論的亀裂は、旅の終着点となるエルミナ城の日没に、こうして一個の人間像として血肉化される。

ライトがアフリカと西洋との結節点に配する日没の表象は、西洋世界の領土拡張を駆動した象徴概念としての太陽を想起させる。ヨーロッパ列強がゴールド・コーストで植民地争奪競争を展開する一方で、コロニアル・アメリカは17世紀当初より、神意を担う選ばれた民として自らを位置づけ、

その西への発展が偉大な新帝国をもたらすと夢想していた。太陽の軌道に沿って文明を西へ拡大する部族としてのコーカサス人種なる概念を、19世紀に史的言語学が科学的人種主義と連動して唱えたことは、アメリカの西漸運動に新たな意味づけを与えるものとなった（Horsman 32-36）。大西洋を渡って新世界に文明を拡大するアーリア民族最強の末裔たるアングロ・アメリカの自画像と、「明白な運命」（Manifest Destiny）を標榜する膨張主義思想が、そこに生起することになる。

アメリカ深南部からヨーロッパを経由して、アフリカ西岸に向かうライトの人生行路は、西洋の人種主義的世界戦略が大西洋に敷いたルートを逆行するものである。その地理的進路は、アウトサイダーとしての主体が脱周縁化を図る転換プロセスと一体をなす。「アフリカの白い主人は、感情的・精神的に黒い奴隷と驚くほど似ている」（*BP* 375）というアイロニーが明示するとおり、奴隷の子孫としてのライトがアフリカに送る視線は、西洋世界に向かって増幅的に逆照射する。

ライトがアフリカに必ずしも理想郷を見出さなかったのは事実である。『ブラック・パワー』には、異質の習俗に遭遇するたじろぎや、十全な理解に達しえない焦燥感が、アフリカへの共感とない交ぜになって綴られる。とりわけ伝統的部族宗教をめぐるライトの立場は、民族的・人種的固有性を主張するネイティヴィズムと対立するものを孕んでいる。実際ライトは、Léopold Senghor 率いる "Negritude" に、政治的な意味での共振性を見出さなかった（Fabre, *World* 193-94）。アフリカの部族宗教に対するライトの批判的視点は、アメリカ深南部の宗教文化に対して、彼が年少期より露わにした抵抗に通ずるものである（Weiss 69）。自伝 *Black Boy*（1945）には、少年時代にミシシッピの黒人教会で回心を迫られた宗教体験が鮮明に綴られる。宗教的共同体の要求に抗うことは、神に見捨てられた者として排除されることを意味し、不信心者を共同体に馴致する伝道集会の儀式戦略は、罪と排除の脅迫的レトリックを行使するものだった。

Sylvester Johnson は、ライトを包囲したようなリバイバリズムや急進的福音主義は、単に深南部特有の狂信としてカテゴライズできるものではなく、むしろアメリカ宗教文化の潜在的パラダイムであることを指摘する。それは即ち、「正統な」構成員からなるコミュニティーが、価値の共有を拒むアウトサイダーを、悪や脅威として記号化する一種の構想力である。ライトの自伝は、プロテスタンティズムの文化内部に働く排除の力学が、人種社会のテロリズム原理のもとで、アメリカ南部黒人の宗教文化に再生産される病理を争点化した。自身の体験した宗教文化についてライトが問題化するのは、黒人マイノリティーが人種主義社会に順応するための基軸システムとして、それが機能する側面である。ジョンソンの指摘するようにライトは、南部黒人の宗教文化における部族主義的要素を、アメリカ的宗教現象のメタファーとして戦略的に表象したと解することができる。「アメリカニズムは一種の宗教である」（Kinnamon and Fabre, eds. 127）というライトの発言の根底にあるのは、体制文化に属さぬ者を〈他者〉と位置づけて自らの真正性を主張する、あらゆる本質化運動（essentialization）に対する批判である。

アフリカの伝統的部族宗教にライトが懐疑を抱くのは、それが西洋の侵略をた易く許した元凶で

あるとともに、わけても故郷と断絶する奴隷の絶望を想像させるものだったことによると考えられる。故郷を去る部族人が幾多の生け贄を土地に捧げる風習は、祖先の霊魂に満ちた土地を離れる行為が、魂を置き去りにするに等しいとされることに由来する。アフリカの出身地を問われて答えに窮するライトは、「我々を売ったアフリカ人も買った白人も、記録を残さなかった」と説明するほかはない（*BP* 40）。自らの出所不明性が、このような先祖信仰の地においてもつ意味を、ライトは当然ながら問わざるをえない。奴隷の宿命を負った者は、先祖の霊に見放された罪深き者だとする考え方を知った時、それがライトに不条理と映ったことは想像に難くない。エルミナ城で、西洋人に奴隷を売り渡す酋長が身を隠したという壁の隙間を見つめるライトは、西洋のみを指弾してアフリカ批判を封印する見地には立ちえなかった。過去を想像的に取り戻すことによって、歴史的断絶の中からアイデンティティを構築する営みは、「反－近代として前近代を永遠に招喚することで満足し続けるような、閉じ込められた文化的に絶対的な人種的諸伝統を取り戻すためになされるのではない」（Gilroy 223）。

ライトはこうして反本質主義的立場をとりながら、土着文化を脱構築することなく、西洋とアフリカとのヒエラルキー関係を切り崩しにかかる。「異教徒は私の性に合うキリスト教徒である（The pagan was my kind of a Christian.）」（*BP* 148）という逆説によって、彼は自分を宿命づけてきた呪縛の外に出るのである。金塊や奴隷に対するヨーロッパの400年に及ぶ狂気的野望は、宗教の名においてのみ正当化されえたのであり、ライトはアフリカの植民地化を、宗教による宗教の支配と定義する。Paul Gilroy の言葉を借りるなら、「人種的恐怖（テロ）の瀆神的なまでの規模が、神の弁護を不可能にする」のだ（Gilroy 36）。ライトは、ゴールド・コーストの脱植民地化闘争が伝統宗教の力を動員するさまを、西洋が文化イデオロギーによって覇権の正統性を権威づけてきた事実と、戦術的相似性を切り結ぶものとして理解する。

アフリカ部族宗教の細部を前景化する一連の叙述に、西洋中心主義的視線の解体を図るライトの意図は明白である。それは彼が *12 Million Black Voices*（1941）において、アメリカ黒人教会を生命力の源として見つめ、その根底に息づく異教的要素を尊んだことにも呼応する。たとえばライトは、アカン族の文化において色彩が感情的意味と分かち難く結びつき、特定の色をもつ物質は、天然・人工を問わず同じ価値を分有すると考えられていることを、引き合いに出す。部族人が、ヨーロッパ人のもたらす他愛ない装身具の類を喜んで金粉と交換した事実は、俗に言われる「未開人の単純さ」ではなく、固有の信仰の所産であったのだ（*BP* 379）。ここに浮かび上がるのは、異文化の思考様式を生物的劣等性と見做して文化破壊に及んだ、植民地主義の自己完結性に対する批判である。

奥地への旅を敢行して、熱帯雨林に包囲された人間心理を体感するライトは、原始宗教が自然環境から必然的に発祥したことを洞察する。直接的脅威となって五感に作用するアフリカの自然現象のダイナミズムに、人間が否応なしにアニミスティックな動機を投影してしまうことを、彼は身を

もって理解した。ジャングルは、先祖が生者を引きずり込もうと身を潜める得体の知れぬ闇であり、神酒や生け贄を捧げる風習もそこに生まれる。キリストをも「401番目の神」として相対化するらしいアフリカの自然信仰を、ライトは次のように描く。

> The pre-Christian African was impressed with the littleness of himself and he walked the earth warily, lest he disturb the presence of invisible gods. When he wanted to disrupt the terrible majesty of the ocean in order to fish, he first made sacrifices to its crashing and rolling waves; he dared not cut down a tree without first propitiating its spirit so that it would not haunt him; he loved his fragile life and he was convinced that the tree loved its life also. (*BP* 290)

水や木や岩や風の精霊に贈与し、荒ぶる自然と共存してきたアフリカ人は、人間を生きとし生ける物の中心とする意識をもちえず、自然と人間を渾然一体のものと捉えていた。ライトは、奴隷貿易に加担した部族宗教の前近代性を批判する一方で、自然の中に神性をみるその世界観に、近代批判の契機を見出す。

かくてアフリカの自然信仰に詩的普遍性を感得したことが象徴するとおり、ライトは、宗教的精神性のすべてを否定するわけではない。「宗教的儀式を脱ぎ捨てた者は、必ずしもそれに無理解とは限らず、むしろそれを精神的特質または心理的問題として内面化しているのだ」(*WML* 54) という言葉に、批判の意図するところは明らかである。ライトが問題化するのは、伝統の中に不合理となって凝結した思考様式の諸相であり、それが歴史を悲惨な現実へと駆動してきた事実にほかならない。近代性の抱える倫理的断層は、世界の宗教的な把握のし方を問い直すことで乗り越えられるべきとライトは考えるのであり、彼がニーチェに多大の関心を寄せた理由もそこにある。

『ブラック・パワー』は自己批判的な懐疑を基盤とし、「西洋の黒人」としてアフリカを対象化する視線の潜在的越権性に自己省察的である。「アメリカ黒人は、自分たちが参入を望む世界について価値考量するいとまもなく、ひたすらアメリカ人となることを熱望してきたがゆえに、アフリカに対して語る資格に最も欠ける者ではないか」(*BP* 321-22) という懐疑が、作品の前提をなしている。この明確な自意識においてライトの語りは、Mary Louise Pratt がアフリカ旅行記のコロニアル・ディスコース分析で明らかにしたような、距離のレトリックとは異質のものである。プラットは、記述する者とされる者との支配関係を解除しようとする『ブラック・パワー』のテクストに、植民地旅行記の修辞伝統を書き直す革新性を読み取る (Pratt 222)。

イギリスに自由独立を要求する史上初の黒人首相となるエンクルマの脱植民地化闘争は、ライトが初めて目にする、黒人指導者による大衆政治運動であった。アメリカ公民権運動に先駆けてアフリカに勃興した民族闘争の「目撃者となる資格 (the "green light" to look, to know, to be shown

everything)」を、ライトは請い求めるのである（*BP* 68)。と同時に彼は、大西洋の海原が自らの胸にかき立てる思いを、「宣言の谺（the echoing declarations)」として聞き取っている（*BP* 26)。ライトはガーナ革命を、アメリカ独立革命精神の実現として見つめたのである。作品末尾でエンクルマに宛てた手紙に明確となる二つの革命の並置は、アメリカ革命を模倣不可能な固有の偉大さと見做すような、あるいは「独立」を西洋だけのものと見做すようなヒエラルキー思考に対する、異議申し立てと言える。大西洋の裂け目からライトが発する語りは、アフリカと西洋世界とを結ぶこの相互接続的文脈において、文化的絶対主義や人種的本質主義と一線を画するのである。

2．反転する故郷

「根なし草／アメリカの孤児」を自認するライトは、歴史に記録されることのない奴隷の子孫としてアフリカへの帰還を果たし、故郷の意味を追求した。アメリカの同時代人の多くは、故国を離れたライトが、アメリカの土壌に根ざすかつての創造性を失ったとみる傾向があった。たとえば、アメリカ黒人ゲットーの創造的作品化にライトの真骨頂をみる Jay Saunders Redding は、ライトがフランスでの亡命生活によって「心の故郷」から切り離されてしまったと考える。実際ライトの人生は、精神的安住の地を求める流浪の旅と言って過言でない。故郷ミシシッピの人種テロリズムを逃れ、大恐慌下のシカゴで、左翼芸術家組織 John Reed Club を通じて共産党と関わる彼は、マルキシズムに、人種的・階級的境界を越える可能性を初めて予感した。*Left Front* をはじめとする媒体は、その革命性の中にアメリカ黒人の体験が、「貢献的役割を担う本拠地（a home, a functioning value and role)」を見出しうるものだった（*The God That Failed* 118)。しかし、アメリカ共産党に隠然と機能する人種主義が、ライトを訣別に向かわせることになる。階級・経済以前の道義的観点から人種問題に接近を図るがゆえに、組織の反動分子と位置づけられたライトは、この労働者運動が度し難い物質主義の産物であることを思い知るのである。

他方、ライトは1940年代半ばより、共産党とのかつての関わりや人種差別批判をめぐり、アメリカ国家機関の圧力にさらされていた。「西洋全体の道徳的混乱と社会的デカダンスを認識化することが、民主国家イメージの不当な独占を図るアメリカのためにとりわけ重要である」と1950年に語るとおり、ライトは、冷戦構造がアメリカという国家システムに潜むファシスト的傾向を刺激する危険を、強く危惧した（Fabre, *Unfinished* 355)。長編小説『アウトサイダー』は、こうした問題意識の結実である。かくてライトが国外から、人種主義に加えて国家主義というもう一つの偏狭さに対して、公然と政治批判を開始したことは、マッカーシズム下におけるアメリカの国家的不興を買ったとされる。『アウトサイダー』出版に当たり編集者に帰国を勧められるも、かつて渡仏時に国務省からパスポート交付を拒否されたライトは、「非米活動」のかどで二度とアメリカを出国できなくなる事態を予見し、これに応じなかった。冷戦時代の国家主義によって、自由な帰還地を奪

われたにも等しい状況だった。

ライトが文学論、"The Literature of the Negro in the United States" に引用する Bessie Smith のブルースは、自らの心情をアイロニカルに代弁するものであろう。

> Then I went an' stood up on some high ol' lonesome hill ...
> An' looked down on the house where I used to live
>
> Backwater blues done cause me to pack mah things and go ...
> Cause mah house fell down an' I cain' live there no mo'

南部プランテーションの貧困と人種差別を脱して、北部工業都市へ向かった黒人大衆の感情的集約を、ライトはこの歌に聴き取る（*WML* 91）。無数の黒人とこの同じ原点を共有するライトにとり、住むべき「家」の喪失は、究極的に国家レベルのメタファーへと発展した。冷戦構造によってもはや西洋世界には望めなくなった自由への希求が、1950年代のライトを第三世界へと向かわせるものであった。

アフリカ系アメリカ人はアメリカを映し出す鏡である——"Look at us and know us and you will know yourselves, for *we are you*, looking back at you from the dark mirror of our lives!"——と、ライトは『1200万の黒人の声』に語る（*12 Million* 146）。鏡に映る像とは、北米大陸に白人も黒人も存在しなかった過去に遡る、歴史的記憶の総体である。『ブラック・パワー』でその記憶を大西洋の東へさらに遡行するライトは、植民地主義の本質を映す鏡としてアフリカを描き出す。

> One reacts to Africa as one is, as one lives; one's reaction to Africa is one's life, one's ultimate sense of things. Africa is a vast, dingy mirror and what modern man sees in that mirror he hates and wants to destroy. He thinks, when looking into that mirror, that he is looking at black people who are inferior, but, really, he is looking at himself and, unless he possesses a superb knowledge of himself, his first impulse to vindicate himself is to smash this horrible image of himself which his own soul projects out upon this Africa. (*BP* 175)

人間が剥き出しの存在となって試されるアフリカという危険な鏡の中に、西洋を鏡像として脱中心化する企図が、ここに表明される。

ライトの視点から見れば、住処を失い漂流しているのは、故郷喪失者たる自分ではなくむしろ西洋世界である。彼はこの観点を、自らが喪失したはずの「根／住処／故郷」を、西洋的状況のメタ

ファーとして逆用し、解釈し直すことによって明示する。ライトは、アフリカという鏡の中に「故郷」の意味を倒立させ、住処を失った漂流者としての西洋を映し出すのである。ゴールド・コーストの植民地統治階級の瀟洒な家並に、灯火の瞬くのを眺めて彼は考える。イギリスが長きにわたり「白人の重荷」と嘆いてみせるものの実態たるや、「未開世界の文明化」というモラルに偽装された金塊への欲望というわけだ、と。西洋は自分の家の身じまいを正してこそ誠実な相手となりうることを、ライトはエンクルマへの手紙に記す（*BP* 167, 387-88）。

西洋世界は「自身の文化から根こぎになりかけている（had partially lost his rooting in his own culture）」がゆえに、諸民族の生活に意味を与えてきた伝統を、かくも破壊的な規模で無効化することに無感覚でありえたのだ。西洋が、「自身の価値観によりふさわしい居住まいを保つなら（more at home in his own world of values）」、人間力のかような暴走を見過ごすことはできなかったであろう。「民族遺産を喪失した境涯に根ざす（rooted in my own disinheritedness）」ライトにすれば、異民族の土地を領有し国家の伸張を企てる西洋は、人種主義という「あさましい安宿（a shabby, vile, and cheap home）」の住人ということになる（*WML* 50, 62）。

アフリカ系アメリカ人は、自由への絶えざる問いをアメリカで最も強力に提起する集団であり、その表現行為は、1950年代に地上最大の「民主主義偽装国家」と言うべきものになったアメリカにおいて、本来的理念を喚起し続ける「代表者の声」になったとライトは考える。彼らの声は人類普遍の問いを発するがゆえに、世界中の聞き手のうちに「望外の故郷（a home such as was never dreamed of）」を見出すことになるのだ。アフリカ脱植民地化闘争に、「心の故郷」と言うべき世界が実を結ぶのはこれからだ ——"The world that they really wanted, the world that would be the home of their hearts, had not yet come into being."—— とも彼は語る（*WML* 105-06, 126）。ライトにとって真の故郷が、未だ達成されない価値の源泉を意味することは明らかである。

かくしてライトは「ホーム」という語に、植民地統治階級の「館」、その後ろ盾である「宗主国文化」、さらには人間の道義的「根拠地」という意味を充填することにより、西洋を、価値の源泉から自己放逐した故郷喪失者／ホームレスの位置に反転させる。「亡命（エグザイル）は、強制退去させられ国籍を失うという、いまではほとんど顧みられない不幸な者たちの特殊な運命であるどころか、規範（ノーム）に近いものに変貌をとげる」（Said 317）という Edward W. Said の主張を、ライトの対抗言説は予見すると言える。

ライトはアメリカ文化の中で生い育ったがゆえに、自らを不可避的に西洋の産物として意識する。しかしその西洋性とは、文化の周縁から生まれる懐疑と批判に裏打ちされたものである。換言すればライトの西洋性は、西洋文化と黒人性との緊張関係から生まれる「二重視覚」（double vision）に宿るものである。ライトはこの概念を、『アウトサイダー』の登場人物である検事 Ely Houston に語らしめた。それによれば、文化の内側と外側に同時に存在するような境界的人間は、インサイダーでありかつアウトサイダーであるという存在様態が生む二重視覚によって、第三の視点を獲得

した「認識の中心」ともなりうる（*The Outsider* 163-64)。このような主体は、自らを取りまく文化と一体でありながら、核心において「永続的分裂（an abiding schism)」を抱え込んでいる。しかしライトにとっては、この分裂状態こそが正常である。自己と文化とに絶えず懐疑や批判を差し向ける、問いとしての存在がそこに生起するからであり、そのような存在様式こそが、自然で人間的かつ健康的な在り方にほかならない（*WML* 49)。ライトは自らの故郷喪失性の中に、存在の故郷となるべきものを見出したのである。

西洋と非／反西洋とのはざまに分節化された存在が、西洋の亀裂としての意味を帯びると考えるライトにとり、文筆行為は、船に乗ることが表象する歴史概念を転覆させることでもある。奴隷船の船底から反西洋的体験を可視化するライトの企てにおいて、西洋と非西洋は背馳するものではない。西洋を「船に乗り遅れた者（"Europe missed the boat.")」（*WML* 64）として反転させるライトのテクストは、非／反西洋的体験を、大西洋の亀裂という決定的位置において、西洋を超えゆくものとして認識するのである。周縁化され忘却された記憶を西洋内部から顕在化させるライトの語りは、西洋文化に解決されずにいる矛盾を指し示し、文化間の相互交渉を呼び込むことによって人間の歴史を再構想しようと図る。後にサイードが「遡航」（the voyage in）と名づける営みは、ライトの著述に明確な原型を見出すことができる。

ライトはアフリカとの二項対立において西洋を文化の頂点に位置づけ、最終的に西洋という故郷に戻るのだとする解釈は、作品世界の全体像を見失うものとなろう。「西洋でも東洋でもない、人間の貴重な遺産（the precious heritage...which is not Western or Eastern, but human)」（*WML* 68）を論じるライトにとり、価値の所有権を問うことはもはや意味をなさない。それは、20世紀の人類が未曾有の危機に瀕しているという時代認識に立つ信念である。太陽の軌道を追う文明拡大への人種主義的野望も冷めやらぬ中、今や人類が原子力という「太陽の核心」を掌中に収めた事実に、ライトは最大の危機意識を向けた。民族主義の台頭や冷戦構造にせめがれる西洋が、自分の世界像のために世界を安全化すべく破滅的な力に依拠するなら、数世代に亘る民族的・宗教的憎悪の反動を招来する、という言葉は予言的である。ライトが脱植民地勢力に託す望みは、単なる近代化以上の問題だった。自由という未完の共同価値を成就するために、西洋を超えたところに世界が再び出会うこと。ライトが求めてやまないのは、そのような公共圏への帰還である。

引用文献

Buck, Norman Sydney. *The Development of the Organisation of Anglo-American Trade 1800-1850.* 1925. Newton Abbot: David and Charles, 1969.

Chiwengo, Ngwarsungu. "Gazing Through the Screen: Richard Wright's Africa." *Richard Wright's Travel Writings: New Reflections.* Ed. Virginia Whatley Smith. Jackson: UP of Mississippi, 2001.

Clark, Michael. "A Struggle for the Black Man Alone?" Rev. of *Black Power,* by Richard Wright. *The New*

York Times Book Review 26 Sep. 1954: 3, 26.

Fabre, Michel. *The Unfinished Quest of Richard Wright.* Trans. Isabel Barzun. Urbana: U of Illinois P, 1993.

————. *The World of Richard Wright.* Jackson: UP of Mississippi, 1985.

Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness.* Cambridge: Harvard UP, 1993. 本文中の訳文は、上野俊哉／毛利嘉孝／鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック —— 近代性と二重意識』（月曜社、2006年）を使用。引用ページは原書に拠る。

Horsman, Reginald. *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism.* Cambridge: Harvard UP, 1981.

Johnson, Sylvester. "Tribalism and Religious Identity in the Work of Richard Wright." *Literature and Theology* 20. 2 (2006): 171–88.

Kinnamon, Keneth, and Michel Fabre, eds. *Conversations with Richard Wright.* Jackson: UP of Mississippi, 1993.

Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation.* New York: Routledge, 1992.

Redding, Jay Saunders. "Home Is Where the Heart Is." *The New Leader* 11 Dec. 1961: 24.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism.* New York: Vintage, 1994. 本文中の訳文は、大橋洋一訳『文化と帝国主義 2』（みすず書房、2001年）を使用。引用ページは原書に拠る。

Shankar, S. "Richard Wright's *Black Power*: Colonial Politics and the Travel Narrative." *Richard Wright's Travel Writings.* 3–19.

————. *Textual Traffic: Colonialism, Modernity, and the Economy of the Text.* Albany: State U of New York P, 2001.

Weiss, M. Lynn. *Gertrude Stein and Richard Wright: The Poetics and Politics of Modernism.* Jackson: UP of Mississippi, 1998.

Williams, Eric. *Capitalism and Slavery.* Chapel Hill: The U of North Carolina P, 1944.

Wright, Richard. *Black Power: A Record of Reactions in a Land of Pathos.* (*BP.*) 1954. New York: Harper Perennial, 1995.

————. "I Tried to Be a Communist." *The God That Failed.* Ed. Richard H. Crossman. 1950. New York: Columbia UP, 2001.

————. *The Outsider.* 1953. New York: Harper Perennial, 1993.

————. *12 Million Black Voices.* 1941. New York: Thunder's Mouth Press, 1995.

————. *White Man, Listen!* (*WML.*)1957. New York: Harper Perennial, 1995.